

# 村岡貴美男 日本画展

## 心象の庭、心象の部屋

【会期】 9月26日(水)～10月2日(火)  
 【会場】 西武池袋本店6階(中央B8) Ⅱ  
 西武アートフォーラム  
 豊島区南池袋1-28-1  
 ☎03(6949)5276(直通)



「顔れ」10号P



「聖盃 (静寂)」8号P



「冠」4号F

### 内側からイメージを紡ぎ出す

現在日本美術院同人の村岡貴美男。昨年初めてデパート美術画廊で個展を開催し好評を博した。1966年に京都に生まれ、91年に東京藝術大学に入学し、各年次で首席の評価を受けるなど非凡な画才を発揮してきた。97年に初入選した院展での受賞も数多く、2014年に同人に推挙された。

「具体的な物が描かれた具象絵画ですが、物質的なその物のリアリティを描きたいのではなく、形の無い気配や余韻、時間や記憶といったものを表現したいと思っています」

そうした実体のないものを内的なイメージの中で構成しながら、具象的なフォルムを当てはめていく。「常に自分の中に答えがあつて、それを発掘して行く作業のようです」と話す村岡の作品には、モチーフとして女性が描かれることが多い。

「女性は謎や不思議の象徴としてモチーフに取り入れています。母性や女性性、物質的な意味での人体を描きたいわけではなく、『精神的な存在感』が描ければと思っています。人物は画面の中で役柄を演じてもらう構成要素の1つとして描いています」

左頁に掲出した作品「心象」は、黄色い服を着た女性が目をつむり、右手で耳の辺りを押さえている。貝殻を耳に当てて波の音を探すように、或いは糸電話で相手の声を注意深く聞くかの

ように、静かに耳を澄ませて集中している。その静かな気配を描き出すところが村岡の画才である。

今展の副題は「心象の庭、心象の部屋」である。気配や余韻からアプローチした村岡の心象風景を、より内的でプライベートな、切り取られた世界の中に落とし込もうとしているように思う。自らの内的世界に対する情緒的、日本的なアプローチともいえる。ヨーロッパを感じさせるような雰囲気と日本的な対象の捉え方、この日本的であり西洋的でもあるという「両義性」は村岡作品の特徴といえる。画家自身も日本人が見ると西洋的な部分が見え、海外の人から見ると日本的な物が見える作品が出来たら面白いと思います」と語る。

味わい深く心地よい余韻のある村岡の新作展。作品の前から立ち去りづらくなる感覚を是非感じて欲しい。

(編集部)



「心象」1号P



むらおか・きみお  
 1966年京都府生まれ。2000年東京藝術大学大学院博士後期課程満期修了。05・10年院展・日本美術院賞／大観賞。14年同人推挙。現在日本美術院同人。